第二期　第百二十三号　（二版）（無料）

音信不通

本のビオトープ

学びあう人々のために

2026.10.10　定有堂書店　発行

ビオトープに棲まう　奈良 敏行
祝 JR完乗 ？　岩田 直樹
「本のある場所」日記 七月(続)　南陀楼綾繁
Transcendence　高木 善祥
日々是雑言(ぞうごん) 21　萩原 俊郎
断片において生まれるもの　板野 円香
私は賢い人間ではありません。　衣笠 康宏
静的と動的　おぎはらきえ
書いていく覚悟　三浦 永理
あきたこまち　堀内 菜摘
本を作る側から（43）　村瀬 謙介
論語について（17）　小原 修治
奈良さんと遁げる　古賀 啓三
楳図漫画の恐怖　ムラカミヒロミ
きのこのこのこ　あきの素生
後書き　ドラメリア

ビオトープに棲まう

奈良 敏行
（定有堂 主人）

先日倦怠感を覚えることがあった。理由もなく身体が気怠かった。いや心が気怠かったのかもしれない。家人が三軒隣の和菓子屋の最中を食べるか？ と言った。しかし休みだった。五軒ほど離れた洋菓子屋でガレットを一個買ってきてくれた。元気になった。

家人は周辺をスイーツ・ストリートと呼んでいる。歩いて三分以内に和菓子屋があり洋菓子屋が二軒ある。七分ほどあるけば大型店舗の菓子屋があり、コンビニスイーツもある。いずれも気持ちをリセットさせてくれる貴重な拠り所だ。

元気になったらどうするか。十二分ほど歩けば若桜橋の北詰に定有堂事務所がある。傍には本屋もある。散歩コースの拠点でもある。ちなみに鳥取駅からここまではアーケードがあり、ほとんど傘がいらない。橋の南詰には森の生活者がある。駅の方に向かっていくとファミマパレット鳥取

店がある。ここにはイートインがあり、コーヒーを飲みながら本を読んだり思考を整えることができる。さらに駅の方に向かうとセルフカフェ鳥取駅前店がある。二十四時間営業だ。高校生が多い。電源コンセントも一つ一つに付いている。みんな長時間滞在している。駅まで行く。我が家からだと十六分くらい。構内にはスタバがある。すぐ近くに本店があるが、構内の方が好ましい。これらが歩いて行ける、わたしの思索の場所だ。疲れたら百円循環バスのくる梨で帰る。

春頃に石橋毅史さんが来てくれたときはアートプレイスすなば珈琲に行った。食事もできた。石橋さんの現況について教わった。韓国で出版された『本は死なない』が話題だ。近刊、トランスビューのリーフレット『本屋な日々一一一号』は、「読書が本屋を追い越してゆく」というタイトルらしい。本屋が読書に追い越される、とはどういう事態だろうと語り合った。

夏には、同じこの場所で南陀楼綾繁さんと数年ぶりの会食をした。石橋さんは本屋を面白がるが南陀楼綾繁さんはミニコミを面白がる。話も盛り上がり、久しぶりに連載してくださることとなった。ミニコミを応援する人なのだ。この会食の場所は県民文化会館の一部で、二階では毎月数回、定有堂教室の読書会を行っている。

隣には県立図書館がある。いつもここで本を読む。五時くらいで切り上げて、コメダ珈琲店に行く。クルマで五分くらいだ。七時くらいまで長居する。回数券を半年分くらいまとめ買いしている。

先日帰り際、本屋 MEKURU の林さんにばったり会った。その時はお互い時間がないので、一週間後に再会しようと約束して別れた。「ひとり本屋」に関心を持っているので、ぜひいろいろ教わりたかった。ひょっとしたら開業するかもしれない二人、定有堂教室「読書室ビオトープ」の板野さんと三浦さんに質問のためにアンケートを寄せて貰った。林さんにその質問に対する応答を記入してもらいながら五時間くらい本屋について語り合った。林さんは四月に開業したばかりで、いま半年になるかならないかだった。

板野さんの質問は、①本屋をやるうえで「一番大切にしていること」、「一番どうでもいいと思っていること」は何ですか？　②店の中で、一番「自分らしさが出ている場所はどこですか？」だった。①の答えは、謙虚でいたいということ。たぶん読者の半歩先をゆくという本屋感覚だと思った。②は「五年日記」を付けているということだった。見せてもらった。黒っぽい表紙で細かい文字がぎっしり詰まっていた。ここに目論見が秘められているのかと驚いた。

三浦さんは、①どんな本を売ろうと思って始めて、実際

どんな本が売れていますか?―答えは「掴めていない」だった。言葉にすると停滞する、いまは流動性に耳を傾けるの意だろう。②本屋になろうと思ったきっかけと、それを元に実際続けられそうか?―わたしは林さんはこの仕事をいつまでも続けると思った。存在が花する姿を見た。③なぜその場所でお店を開こうと思ったのか?―最初は若桜橋近くの川端通りで計画したが、文化的な匂いを避けてみたかった、というのが理由だ。正当な判断だと感じた。④なぜ本屋でなければならないと思ったのか?最初のきっかけが気になる。―ある日ふと「その手があったのか!」と気がついた。至福は突然訪れるものだ。⑤本屋の楽しいところと苦しいところは何か?―楽しさは理想の輝き、苦しさはまだ現実が追いつかない。

わたしの質問は「ひとり本屋」という言葉をどう思うか?MEKURUの林さんは、「ひとり本屋?」と首をかしげるばかりだった。新しい人、新しい本屋がここにあると思った。新しい「言葉」はまだ生まれてはいない。

萩原俊郎さんと今週、同じアートスペースすなば珈琲で会食。倉吉から遠出してもらった。新聞社の五十年史アーカイブの仕事が一段落したので、これからのゆとりの時をどう過ごすかがテーマだった。昔話をたくさん聞いた。かつて会社が吸収した大阪の夕刊紙の話は圧巻だった。小説に書くか?と盛り上がったが、墓場へ持っていくのが妥当だろうという結論に落ち着いた。小説を書く人生は幸せでないということに二人は気づいた。人生に因果関係(プロット)は必要ない。心躍ったあれこれがあっただけで、十分だという得心だった。

2026.09.18

徳永 進 著
『老いのみちしるべ』
朝日新聞出版 2026

2001年に鳥取市内にホスピスケアの診療所を開設。『死の中の笑み』ゆみる出版 1982 講談社ノンフィクション賞受賞を始め著書多数(40冊以上)。地域医療に一身を捧げ続ける。『増補 隔離 故郷を追われたハンセン病者たち』岩波現代文庫も代表作。その最新作。

祝　JR完乗？

岩田　直樹
（再解釈本舗・「読む会」講師）

九月のシルバーウィーク、ついにJRを「完乗」した。完乗とは完全乗車の略語でもちろん辞書にはない。

タイトルに「?」が付されているのは、二〇二〇年七月豪雨によって橋梁、線路など四四二ヶ所が流失した肥薩線の八代・吉松間八六・八キロが、現在運休中であるからだ（二〇三三年度中に八代・人吉間五一・八キロが復旧予定）。

二一世紀が始まった頃だろうか。『旅』という雑誌を本屋でたまたま見つけた。雑誌を買う習慣はなく立ち読みしようとする。付録が挟まっていて邪魔だ。記事の内容より面白そうで、付録のために雑誌を買った。

本棚の奥をゴソゴソ、ようやく探し出す。『めざせ完乗！「絶対保存版」JR乗りつぶしマップ　付・全線全駅キロ程表』（全六六頁、以下『マップ』）。奥付を見ると、『旅』二〇〇三年八月別冊付録、JTB発行、とある。（『旅』は一九二四年に発刊された日本最古の旅行情報誌で二〇一四年に廃刊。）

そうなのだ。私が「乗り鉄」になったのは『マップ』がきっかけである。とはいえ、すぐに「乗り鉄」の人生が始まったわけではない。

それ以前は、毎年のように全国の岬・灯台めぐりをしていた。辺鄙な岬へ行くには自家用車を使うしかない。当時、就職して一五年目。毎日の通勤はJR利用であった（就職以来三九年のうちJR通勤は三二年間）。仕事は鉄道、プライベートは車、と棲み分けをしていた（ある意味「二刀流」）。「乗ること」自体が趣味になるとは考えたこともなかった。

「乗り鉄」が気になりだしたのは「不惑」を過ぎて仕事が急に忙しくなった時期と重なる。さらに子どもの進学・就職、父の病気・死など、のんびりと鉄道に乗っている場合ではなかった。

『マップ』にはメモが挟んであり、「二〇一四年九月一五日（日）現在、一四〇三二・八キロ」とある。このときのことはよく覚えている。

「そろそろ完乗を目指してみようか」と思い立ち、大切に保管していた『マップ』を取り出した。電卓で計算する。それまでJR乗車総延長を意識したことがなく、完乗率が約七割というのは想定外に高い数字で驚きだった。せいぜい六割、と予想していたからである。

これだと簡単に完乗できそうだ。そう思ったのは大きな間違いだった。私が乗ってきたのは主に幹線であり、「乗り残し」は支線となる。関西、中国、四国ならば無理すれば日帰りが可能だ。しかし、北海道、東北、関東、中部、九州となると時間もお金も相当かかる。一筆書きのように効率よく乗らなければならない。

あれから苦節？一二年。「乗り残し」に挑戦する際、旅費節約のために現地まで自家用車を使い、当該路線だけ乗ったこともある。「真の乗り鉄」にとっては邪道だろう。ハプニングを含む諸々の出来事は割愛する。

今年六月、最後の一区間となった。これが何とも難易度の高い路線ではないか。

「乗りつぶし」に最も厄介なのは盲腸線である。当然、終点が行き止まりで戻って来なければならないため、二倍の時間とお金がかかる。数々の路線を乗りつぶして最後に残ったのはやはり盲腸線だった。一駅、一・八キロの区間は「楽勝！」と思われた。

越後湯沢駅とガーラ湯沢駅の間を三分で結ぶ上越新幹線支線は歩いても三〇分はかからない。では、何が「厄介」なのか。

スキー、スノボを趣味とする人はご存知だろうが、祝祭を意味する「gala」を冠するガーラ湯沢は有名なスキーリゾートである。この支線が冬季運行であることは容易に想像がつく。日本でも有数の豪雪地帯を車で走ってこの地に行くのは、鳥取の雪道とは違って桁違いに危険を伴う。しかも、乗るのはわずか一駅である。

頭を抱えてしまった私は「乗り鉄」の師匠にメールで教えを乞うた。一回り以上も年下で理論肌のかつての同僚は「簡単ですよ」と即レス。シルバーウィークの五日間、東京・ガーラ湯沢間を毎日一往復だけ運行（東京発）、との回答であった。

お先真っ暗だった私の心に一筋の強烈な希望の光が差し込んできた。ちょうど北関東にいる身内のところに行く予定があったのだ。

九月二〇日（日）、東京八時〇三分発の「たにがわ四〇三号」は越後湯沢駅を九時三五分に発車。三分間の乗車でガーラ湯沢駅に九時三八分に到着。乗車券一六〇円、自由席一〇〇円。越後湯沢駅前の駐車場まで徒歩で帰る。不思議なことに何の感慨も湧いてこなかった。

二〇三三年度中の肥薩線の部分復旧、最速で二〇二六年頃のリニア新幹線開業、二〇三八年度末予定の北海道新幹線札幌延伸。心の底から喜びを感じるために、あと一二年は元気でいたいと思っている。

「本のある場所」日記　七月（続）

南陀楼綾繁
（ライター・編集者）

7月30日

朝、ホテルのロビーで集合して、岩美町へ向かう。鳥取県の東端に位置する町だ。ここで県の図書館大会が開催される。岩美町中央公民館に着くと、準備の最中だった。会場は毎年持ち回りで、その地域の図書館職員が担当になるのだという。

午前中は基調講演と事例発表。ロビーでは〈SHEEP SHEEP BOOKS〉が販売ブースを出している。店主の高木さんと並んで、自分の本を買ってくれた方にサインをする。午後、NPO本の学校が主催する第4分科会で「地域の記憶を残すために」を題して話す。図書館の〈居場所〉としての機能を強調しすぎるあまり、本来大事にすべき蔵書が置き去りにされていないか。後半では柴野京子さんと議論する。会場の反応は結構よかったようでホッとする。

鳥取市に戻り、文化会館の〈すなば珈琲〉で懇親会。そのあと、駅前の商店街の「砂鳥ビル」にある〈シトルデ〉へ。前日のトークに丸山伊太朗さんが参加されていた。東京の中野で〈カルマ〉という無国籍料理屋をやっていたが、鳥取に移転。昨年閉店して、私設図書室〈トりんく まんまる〉をオープン。それとは別に、古本屋としてシトルデを開いたのだという。何人かで店番を回しているが、いわゆるシェア型ではなさそう。丸山さんの蔵書を使って遊ぶ場所というイメージだろうか。ゆるい「本のある場所」だ。図書館大会の出席者にこの店の常連もいて、わいわい話しながら楽しく過ごす。

7月31日

朝、ホテルから3分あるき〈喫茶べニ屋〉へ。ここのねっとりした黒いカレーが好きで、鳥取市に来るたび食べるのだが、朝8時から営業しているとは知らなかった。オープンと同時に入り、おお、この味だと思いながらコロッケカレーを食べていると、男性がカツカレーの持ち帰りを頼んでいた。ホテルに戻り、鳥取駅から山陰線に乗る。

倉吉駅からバスで、鳥取県立美術館。昨年3月に開館した新しい美術館だ。「マンガを拓く 谷口ジロー」展を観ていると、「倉敷から遠いで」さんと会う。ハンドルネーム通り倉敷在住の古本好きで、今日は倉敷から倉吉まで遠いでさんだ。

遠いでさんの車で、美術館近くの古本屋〈エスキース〉へ。

落ち着いた雰囲気の店内で、文学や美術の本が多い。私の著書が何冊もレジ横に並び嬉しい。その後、新刊の〈倉吉ブックセンター〉、無人古本屋の〈緑の水〉と回る。途中、久しぶりに行った〈夜長茶廊〉でカレーのランチ。ナンがうまかった！そういえば朝もカレーだったが気にしない。

湯梨浜町の〈汽水空港〉へ。店主の森さんが町議会の議員としても活動中。夜は、福岡から来たミュージシャンのタケダ2000GTさんとトーク。タケダさんの初小説集『戦中派と缶チューハイ　アサイラム公園の夏』（虹霓社）について話す。トークの合間に話に関連する曲のライブを挟んだのが、意外にうまくハマる。

終わって、ゲストハウス〈たみ〉のカフェで森さんらと話していると、数日前から泊まっていた女性が私の『本好き女子のお悩み相談室』（ちくま文庫）に登場した方だと判り、偶然に驚く。つくばの「有朋堂書店一箱古本市」に「越境文庫」として出た当時の大学生。その時は思い出せなかったが、帰京して本を見直すと、ロシアに留学するというので「恵加手りな」さんという仮名にしているのだった。同書で話を聞いた39人のみなさんのその後が知りたくなった。

8月1日

朝、松崎駅前の〈アスコット〉でモーニング。昨夜の女性もやってきて雑談。別れて山陰線で米子へ。

米子市立図書館で書庫の取材。生田春月文庫など特徴ある蔵書が多く、いつものことだがたちまち時間が過ぎていく。永井伸和さんが顔を出して、別件で来館されていた上田京子さんを紹介してくれる。この館の元職員で、生田春月の評伝を何冊も書かれている方。

米子駅で時間があったので、近くの店でちょっと飲んで、牛骨ラーメンを食べる。バスで米子空港へ。羽田空港に着いてやれやれと思ったら、そこから延々と続く動く歩道＆通路の連続。間違いなくこれまで羽田で歩いた最長距離。3キロは軽く歩いた気がする。足が辛く、荷物が肩に食い込み、途中、心から折れて座り込んだりしつつ、なんとかモノレールに乗り込んで帰宅。充実した旅になったが、疲れた。そして中二日で、今度は石巻に向かうのだった。

南陀楼綾繁　著
『本のある場所を訪ねて』
教育評論社
2026

Transcendence

髙木　善祥
（SHEEPSHEEP BOOKS）

七月三十一日、お世話になっている出版社の営業Oさんが来鳥。共通の友人と三人で、出版業界のいい話とわるい話の両方をつらつらと話す。

＊

八月二日、山陰夏の本まつりに出店。鳥取県内でも行ったことがないところはたくさんあって、今年開催された日野町も未踏の地。車で二時間弱だったが、山へ向かう道のりと心理的な距離でもっと遠く感じた。

初めての場所なのでどんなものが売れるかわからないため、新刊と古書両方とも幅広くセレクト。「読みがあった！」で売れる本と「これを買う人がいるとは！」の間を行き来する。なんとなく決めた場所もちょうど人が滞留するところで、たくさんしゃべってたくさん売れた、良い一日。関係人口、というほどまだ濃くはないが、いろんな場所で少しずつかかわりをもてたらと思う。

＊

八月四日、通常業務。図書館からの注文品について、小さい出版社へは公開されているメールアドレスや公式サイトの問い合わせフォームから連絡するのだが、まあまあの割合で返事が返ってこない。三日以上反応がないと電話で「先日メールを送ったのですが」と聞くと、まあまあの割合で「見落としていました」と謝罪される。

そして「ファックスでお願いします」と言われ「ファックスは使ってないです」と答えると「じゃあ電話でお受けします」となる。

会社規模の大小問わず自社の商品を書店向けの発注サイトに登録している出版社も多いが、出版／書店業界はいまもファックスがバリバリに現役である。そして当店はファックスを導入する予定がないので、さらにアナログな電話での注文を継続している。些末な話ではあるが、「だれがどのコストを負担するのか」という業界の問題でもある。

＊

八月五日、NPOの方で、グーグルの方と打合せ。「グーグルと打合せ」と書きたいだけ、という本音はいったん置いておいて、日本語が堪能なアジア系の方と（多分現地から）オンラインで話し合う。昨日との落差よ。

＊

八月七日、打合せを終え、友人に案内してもらってサブカル好きが集まるバーへ初訪問。平日の遅い時間で他のお客さんがいなかったため、よく来てくださるバーのマスターと友人とで延々と音楽談義。マスターは私より二回り近く若いのに、八〇年代や九〇年代のことをよく知っていて驚く。

＊

八月一九日、喜久屋書店国府店が最終営業日。閉店のニュースを目にしていたが、結局閉店までに訪れるタイミングがなかった。中規模の店だが、担当者の熱意が伝わるPOPがあったり、郷土の本をしっかり取り扱っていたりとよい店だった。同じ敷地にスーパーとダイソーがあり、近くに学校があるのに、閉めざるを得ない現実を、わがことのように考える。

＊

八月二十五日、午前中に取材。今までとは違う媒体なので質問の角度も違い、普段以上にたくさん話した。自分の考えが整理できるので、時々誰かに話したり文字に残しておいたりしておく。

＊

八月もアンドプレミアムの影響は大きく、北は北海道から南は北九州市まで、たくさんの方にお越しいただく。「わざわざ行った甲斐があった」と思ってもらえているだろうか。

【参考文献】

『老いのみちしるべ』徳永進　朝日新聞出版
徳永先生の最新刊。私もすでに初老の域に手が届きつつあるので、心の準備だけでも早めにしておこうと思う。

『出会いの唯物論』ルイ・アルチュセール市田良彦／訳平凡社ライブラリー
よいタイトル。

『博覧狂気の怪物誌』後藤護　柏書房
分ける／並べることの狂気。暗黒綺想家ひさびさの著書。

定有堂ビル2階　古書・新刊の本屋
SHEEPSHEEP BOOKS　店主　髙木善祥

定有堂倉吉支店　90

日々是雑言(ぞうごん)　21

萩原　俊郎
（倉吉市在住者）

日ごろ気になることを、つれづれなるままに。

「高市アンケート」なるもの

お盆の少し前になると、ゆうパックで重たい荷物がどんと届く。毎年恒例の「鳥取文芸」の応募小説の審査。毎年25～30編ほどの応募数は、地元文芸誌として多いのか少ないのかは知らないが、高校生から熟年世代まで、恋愛小説、時代小説、伝奇小説…ジャンルに富み、3、4日は朝から晩までずっと読み通しの毎日となる。

プロではない分、書き手の「熱量」というものが伝わって来て、おいそれと優劣つけがたい。これに順位をつけ、ましてや賞まで決めるのだから、結果に一喜一憂するだろう書き手の表情が目に浮かび、なおさら慎重になる。

かつての職場でやっていた社員採用試験の小論文審査もそうだった。点数が出る筆記試験はともかく、この小論文の評価で、彼ら彼女らの一生が決まるのだ。簡単に読み飛ばすことはできない。

多くの企業では、人事異動の季節になると社員に「自己申告書」というものを書かせる。元職場もそうだった。第2志望まで、その理由、自己PRの欄もある。

だが、企業広しといえど、「それを家に持ち帰って、自分が全部決める」などと言い出す社長はまずいない。元職場には約300人いた(今はもっと少ないが)。本当にそんなことを社長が始めたら、社内がざわめく。

自民党の衆院議員は、大勝して316人。それを「全員にアンケートして私が決める」と内閣改造に向けて一国の首相が言い出した。第5志望まで記入できるという。

公邸に持ち帰って、仮に「1議員につき5分」目を通しても26時間20分。読み終わると、さらに議員らの採否、ポジション、担当省庁を割り振る仕事が待っている。

ただでさえ「私は国会対応でろくに寝ていない」とこぼす首相である。多忙な公務の合間にこんな〝離れ業〟ができるのか、そもそも怪しい。企業の人事担当者なら「死んじゃうで。組織のトップがやる仕事ではない」と一笑に付すはずだ。こんな「嘘くさい話」が永田町ではまかり通っている。

「テレビ持っていないから」

「高市アンケート」といえば、こんな珍妙なやり取りもあった。

日本テレビ『ZIP』のニュース解説。官邸担当のキャップは、高市アンケートを「議員らの政策や積極性、情熱を見極めるもの」とベタ褒めした末、「例えば、小野田紀美経済安保担当大臣。首相側近の話によれば、『外国人政策をもっとやりたい』と書いた熱意が決め手になった」と大臣続投の〝裏話〟を披露したつもりだったが…。

待てよ。このアンケート、対象は衆院議員で、そもそも小野田参院議員には配られてもいない。日テレはベタ褒めするあまり、対象が全自民党議員と勘違いし、小野田大臣の「書いてもいない熱意」の大誤報を流したのだ。ところが、この「気恥ずかしい誤報」を謝罪した日テレに対し、小野田本人のコメントがまたすごい。「私、テレビ持っていないので知らなかった」

再び、エーッである。彼女は秘書を抱え、後援会事務所も持つ国会議員だ。テレビを観てなくても、自分に関する報道はそこから一報がすぐ入り、対応を協議するはず。

ズブズブの関係

まあ、ニュースや社説を見ると、今や日テレ・読売新聞は、かつてのフジ・サンケイをしのぐ「高市応援団」になりつつある。だから、高市の側近中の側近である小野田大臣としては、わざわざ「自分たちの応援団」を貶めるコメントは避けたのかも知れない。それにしても「テレビ持ってないから知らなかった」は、ないだろ。

政権とメディアの関係がズブズブのなれ合いになりつつある。前号、「いずれ高市の積極財政は破綻をきたすに違いない。その時初めて人々は『選択を誤った』と気づく」と書いたが、それはあまりに楽観論と思うようになった。

消費減税をはじめ高市の積極財政がことごとく失敗し、物価高、円安インフレがさらに進んでも、彼女は「中国のせいだ」「党内の抵抗勢力がじゃました」と責任を外になすりつけるに違いない。その時、メディアも一斉に同調し、今の危機を産んだ「外敵」に対する「国民の一致団結」なるものを大音量で垂れ流し始める。そして日本は「いつか来た道」を再び歩み出す…そんな予感が膨らむ。

くだんの小説の審査は無事終わった。選考結果を送ると、疲れがどっと出た。私と3つしか年の違わない高市の顔を見ると…元気いっぱいである。さもありなん。

断片において生まれるもの

板野　円香
（薬剤師・岡山県在住）

先日、岡山の「みんなの表町書店」の店番をした。このイベントでは、出店者が交代で店番をすることになっている。九月二十一日の祝日が、私の初当番日であった。

「みんなの表町書店」とは表町商店街の「どこかの空き店舗」を借りて行われるシェア型書店のことで、一昨年は「末廣履物店」、昨年は「マツオヤ食器店」で開催された。昨年のマツオヤ食器店では二十年ぶりに店がオープンし、同時に食器の閉店セールも行われたので、書店どころでない忙しさだった。そういえば、店内に掲示してあった本物のピカソの絵画、あれは結局誰の手に渡ったんだろう……。

今年は「文化人の靴　創美」で開催される。戦後まもなくから七十年以上に渡って営業していた靴屋には、今も様々な種類のなめし革や、靴の成形に使われていた靴型が残されている。店内のつくりも随所にこだわりが見られ、地面からL字型に伸びるオーダーメイドの鏡は、試着した靴を座ったままでもよく見られるようになっている。「みんなの表町書店」は、本を売るだけでなく、今ではなかなか見ることのできない、昭和のデザインが残る建物や店主の意匠に触れる貴重な機会でもある。

重いシャッターをガラガラと開け、これまた重いガラス戸を開放し、パチパチと店内のスイッチを入れて回る。その後、店の前に廉価本のワゴンと立て看板を出し、開店。

店の一番奥、半島のように突き出したカウンターがあり、其処にレジが設置されている。店番は基本的に一日をここで過ごすことになるが、立ちっぱなしでは疲れるだろうと、誰かがご厚意でキャスター付きの椅子を用意してくれていた。有難く座らせてもらう――が、ここで問題が発生。大人の胸下あたりまであるカウンターに対し、椅子は通常のオフィス用。高さが全く合わない。入り口から見ると、頭頂部だけが見える状態である。入店した客からすれば、店の奥にぼんやりと浮かぶ毛むくじゃらの何か……怖すぎるだろう。椅子を最大の高さまで上げ座り直す。しかし、その成果も微々たるもので、今度は首から上だけがカウンターの向こうからのぞく形となる。カウンターに乗る生首。まあ、お客さんが来たら立てばいいし。しばらくは生首スタイルのまま営業することに決める。

ニール・ヤングの曲が響き渡る店内。開店から十分ほどして一人目のお客さんが来店した。しばらく棚を見て回った

後、『ロリータ』を購入される。《ロ・リー・タ。舌の先が口蓋を三歩下がって、三歩めにそっと歯を叩く。ロ。リー。タ。》という冒頭で有名な、アレが書いたアレである。本日最初の売り上げ。

この日はさほど忙しくなく、かといって客足が途絶えることもなく、小休止を挟みながらコンスタントに二〜三組のお客さんが入店するような状態であった。レジを打ち、売れた本を記録し、空いたスペースに別の本を面出しし、聞かれれば書店の概要を紹介する。どれも直ぐに終わる仕事で、次の対応を待つ時間の方が長い。結局、ほとんどの時間を持参した小説を読み直して過ごすことになった。持参したのは、定有堂「読書室ビオトープ」の九月の課題本でもあった、ハン・ガン『すべての、白いものたちの』。

本書は、生後わずか二時間で亡くなった姉をめぐる記憶と、鎮魂・再生への祈りをテーマにした小説で、雪、灰、砂糖、産着などの「白いもの」を頼りに、研ぎ澄まされた文章で物語が紡がれる。ハン・ガンは詩に精通しており、感性の乏しい私には難しいのではと敬遠してきたが、先入観に反してかなり面白く、素晴らしい小説であった。

『すべての、白いものたちの』は、姉の生きていた時間を「白いものたち」を通じて生かそうとする話で、小説のようなパートと、詩のように抽象度の高い章が入り混じって展開される。流れ自体は途切れ途切れというか、ザッピングのような作りになっているが、それが詩の持つ特性によって時間の制約を飛び越え、断片的な記憶への介入や解釈を可能にし、彼女ならではの鎮魂・再生を可能にしている。通常の小説のように連続的な語りでは、この魅力は出せなかっただろう。視点・構成共に、実に見事な作品であった。

店内を見回す。「みんなの表町書店」の魅力は何といってもこの構造ではないか。形も様々な木箱がバベルの塔のごとく上へ上へと積み上がり、ZINE や詩、歴史小説などが脈絡なしに箱の主たちによって展開されている。が、完全に独立しているわけではない。例えば岡山の古い建物を集めたZINEの隣に岡山ゆかりの永瀬清子の詩集。副読本のようにハンセン病の本、郷土史までもが別の棚にある。意識外の、あらゆる文脈で繋がっているような空間。断絶、あるいは断片ゆえに生まれるものがあるのではないか。

そのような考えを抱きながら、閉店の準備を進める。ふと、気になる本があり、購入する。帯には「この娘を連れ帰って、自分好みに育てよう！ よこしまな、リアル彼女育成ゲームの結末は？」とある。『ロリータ』に始まり『痴人の愛』に終わる一日となった。意味はきっとない。

私は賢い人間ではありません。

衣笠康宏
（cafe mellow）

だから、賢い振りをします。
空気になりたくないからです。
会議では「なるほど」と頷きます。
時には眉間にしわを寄せて、「私はそう思わないけど」と言います。
そういう顔をしていると、自分も少し賢くなった気がします。

昔のことは、あとから聞こえてくることがあります。
レコードの針が溝をなぞるときの小さなノイズのように。

長いあいだ会社員をしていました。
その頃、ひとりの上司にかわいがってもらいました。
その人は頭の切れる人でした。
仕事にも厳しく、部下の不備には容赦がないことで知られていました。
ところが、私はほとんど叱られたことがありません。
もちろん不備はありました。
見落としもありました。
なのに、その人はなぜか私には穏やかでした。
今になって思うのです。
あの人は最初から分かっていたのかもしれません。
「この人は賢い振りをしているだけだ」と。
そう考えると、いろいろ辻褄が合う気がします。

今年、私は長く勤めた会社を辞めました。
そして妻とカフェを始めました。
店の名前はcafe mellowといいます。
開業してから気づいたことがあります。
コーヒーを淹れるのに、賢い振りはあまり役に立ちません。
掃除もそうです。
食器洗いもそうです。
焙煎もそうです。
お客さんの前では、意外なほど簡単に化けの皮が剥がれます。
賢いと思われることより、また来てもらうことの方が難しい。

今回、『音信不通』の原稿を書くにあたり、一度それらしい文章を書きました。
少し難しい言葉も使いました。
考えているように見える文章でした。
書き終えたあと、しばらく画面を眺めていました。
読み返してみると、どこにも私がいませんでした。
それから「全て選択」を押し、「削除」を押しました。
これは、そのあとに残った文章です。

静的と動的

おぎはら　きえ　（蔭山）

八月も終わるころ。二〇二六夏の思い出を作るべく、滑り込むように境港市にある海とくらしの史料館へ行ってきた。

鳥取市立中央図書館で、たまにサメのはく製の展示がある。六体とか七体とか、体長は一メートルいかないくらいの小ぶりなサメが、ガラスケースに入れられることなく、そのまま長テーブルに並べられて展示されている。ホホジロザメとか、アカシュモクザメとか、ネコザメとか、個性豊かな形状のサメたちが、骨も肉も抜かれて固定されている。

防腐加工の薬剤で、はく製はみな同質のてらてらとした光沢をしているが、それでも皮膚の質感は伝わってくるし、色合いとか、形状をまじまじと観察することができる。ホホジロザメの口の中を覗くと、歯の裏には三段くらい生え変わる歯が控えていて、ぞわぞわする。

はく製のそばには「海とくらしの史料館より出張展示」と掲示があり、長年鳥取県に住んでいながら、そんな施設があることを初めて知った。数体のサメでも興味深く眺められるんだから、史料館に行ったらもっといろんな魚類を堪能できるだろうと、ここ数年温めていた行き先だった。

そして親の介護などで慌ただしかった今年の夏。せめて一回くらいどこか遠出したいと、一時間半ほど車を走らせて初めて海とくらしの史料館を訪れた。

入館して早々、体長四メートル超のホホジロザメに出迎えられる。そばには「黒いダイヤ」のクロマグロ。こぶしほどの大きさのハリセンボンが群れを成して天井から吊るされ、種々の魚のはく製がみっちり展示されていた。興奮した。通常の水族館ではできない観察をした。魚のはく製たちは、泳いだり隠れたりすることはなく、展示場所から一切動かないのだ。水中ではなく陸上にいて、その細やかな形状や鮮やかな体色を披露している。私はカニの一種のノコギリガザミの人間の歯を埋め込んだようなハサミを見つめた。ホウボウの翼のような胸鰭を見つめた。

福岡伸一『動的平衡2　生命は自由になれるのか』（小学館）の一節を思い出した。

「かつて昆虫少年だった私は、美しい蝶、珍しいカミキリムシを求めて捕虫網を振り回していた。（中略）

蝶を捕らえたいと思うのは、その美しい翅をもっとよく見たいからである。高速で敏捷に飛び回る蝶は、決してゆっくり眺めることができない。そこで私は蝶を捕まえ、きれい

に展翅し、その美しさを固定したいのである。そしていつまでも飽くことなく眺めていたいのだ。」

海とくらしの史料館のホームページでも、これらのはく製を作った種政幸氏の「図鑑でしか見ることのできなかった「本当の魚」を子供たちに見せたいという熱い想いが、多数のはく製を産みました。」と紹介されている。

大人の私も「本当の魚」をここまで見ることができて、大いに満喫した。しかし一方で、何か違和感も感じていた。福岡ハカセが解説している。

「動き続けている現象を見極めること。それは人間が最も苦手とする認識である。だから人間はいつも一瞬、時間を止めようとする。（中略）

時間が止まっているとき、そこに見えるのは、本来、動的であったものが静的なものとしてフリーズされた無惨な姿である。それは、かつて動的な平衡にあったものの「影」である。」

私が感じていた違和感はそういう疑念や罪悪感なのかもしれない。しかし福岡ハカセは研究者なので、次のようにも述べている。

「不思議なことに「影」を見続けていると、そこには見事なまでに秩序が立ち上がって見える。時計仕掛けの精密なメカニズムが。」

史料館に行った数日後のこと、夕食を済ませて歯磨きをしようと洗面所の電気を点けた。歯ブラシをくわえ、ふと鏡を見ると右肩に何か付いている。黄色っぽいトゲトゲが二列並んでいる。この日着ていたカットソーは黒一色で、そのような模様はない。よくよく見てみると黄色っぽいトゲトゲは脚で、本体は服の色に紛れていたが、それはムカデだった。鏡ではなく、改めて自分の右肩を直に見た。ムカデだ。私は絶叫した。なぜ、いつの間に、どこから現れたのか。さっき部屋で寝転んでいるときか、それとも今、天井から落ちてきたのか。しかし絶叫してもムカデは私の肩にいる。のしのしと私の顔に向かってくる。

驕っていた。私は自然の観察者なんて優位にいるわけではない。私もムカデも、あのはく製にされた魚たちだって元々は同じ動的な世界に生きているのに。

（著作）おぎはら きえ『迷妄蒙昧』蔭山 2025

イギリス留学記　13

書いていく覚悟

三浦　永理
（三十一歳・女性）

イギリスに行っている間に、何度か迷ったことは、この生活をどれだけ発信するかだ。

ロンドンには、日本人コミュニティが、それなりの大きさで存在していた。駐在員、外交官、大学院生、親についてきた子どもたち、ワーキングホリデイ、あるいは現地で就職したり、起業したりしている本格的な移住者たち。

それぞれの人にとって、「ロンドンで暮らす」という現象は違うものになる。大学院に来ている学生の中にも、官公庁の人事院派遣で来ている人、企業派遣で来ている人、学部からストレートで来ている人、退職してから来ている人、自腹を切って来ている人。自腹を切っている私たちのような人の中にも、実家がそれなりに応援してくれていて、奨学金も出ている私は、恵まれている方だった。私より魅力的でガッツのある人たちが、その奨学金に通っていなかったこともあり、私はちょっとした珍獣扱いにはなっていた。

が、実際にロンドン生活の発信をしている人たちは私の何倍も魅力的である。地方公務員の仕事を辞めて、修士の卒業後に現地就職をして暮らしている人。ワーホリでロンドンに来て、本の執筆をしながら、修士を始めようとしている人。毎日のようにショート動画を撮影しながら、日々の悩みも含めて発信していた修士の同級生。青年海外協力隊を終えて、修士にチャレンジする人。ものすごくいい成績を収めながら、本業の仕事も続けている人。note、X、ZINE、書籍、発信を毎日のように続けている人たち。

一方の私は、留学の最中では、そんな風に発信する気にも、日記を書く気にもならなかった一年だった。

ひとつは、どこかで帰国後に教員に戻る気でいたから、というのもある。自分の名前「だけ」で仕事をするのではない自分を想定していた。特に、教員の発信というものは、難しい。個人情報の問題もあれば、教員として生徒にどう見られるかという問題もある。

ただ、そういう人たちの湖畔に浮かぶ白鳥のような発信だけを見ていると、どこかで「うらやましい」と思っていた自分もいる。彼らは発信を通して自分の存在を示すことで、ロンドンの知り合いも増えていった。一方の私は、現地の知り合いはほとんどいないし、年下すぎるコースメイトとは、本

当に数人を除いては、なかなか関わることができなかった。寮も、キッチンでいきなりしゃべりかけられるのが苦手で、最後の方は部屋にいてばかりだった。中高時代、そんなに中心にいるメンバーでもなく、部活以外は地味に過ごしていたことを思い出す。生徒としての私は、目立たないのである。

私が白鳥を比喩として使ったのには理由がある。彼らの努力は発信の前に着実にあった。水の下では、多くの足掻きが、努力がある。ものすごく苦労をしている上での発信だと分かっていても、となりの芝生は青い。

アカデミアで生きるということも「publish」と距離をとることはできない。修士の課題は、それらを意識したアカデミックエッセイが基本であった。だからこそ、一番上の「distinction」ではなく、「merit」の成績がつくたびに、落ち込んだ。そうやって「どうだった?」と人に聞くと、その人は余裕で一番上の成績を取っていたなどということもある。成績は、コメント共に返されるが、どの点で劣っていたかは、あまり示されない。本当にあと1、2点で「merit」となると、「これだけ褒めといて、それかよ」と思うことも多い。「書く」ということにやる気を失う。思えば、中高時代の私は「書く」ことで褒められたことはあまりなかった。うまく型を自分のものにするのが苦手なのだと思う。天才ではない。

「これだけ書いているんだから、本にして欲しいです」と言われると、小さく本にするという営みを続けるか、なんとかSNSのフォロワーでも増やして、あるいは業界でのキャリアを築いて、商業出版を目指した方がいいのか、考えてしまう。といっても、自分は自分を売り込むほどの気力があるわけではない。

が、一方で自分の名前で仕事をしていくことの意味を考え始めた。「普通の教員です」という風に働くのは、九月からの今の職場が初めてな気もする。「普通の教員」であるならば、学校組織に属していくためにも、出る杭になりすぎないほうがいい。ただ、今までの経験、学んできたことを生かすためには、少しでも書き残して、積み重ねていく必要があるのだろう。それを他者に開くのか、開いた時に私は批判される覚悟があるのか、正直まだわからない。が、この一年間を経て、自分の名前で仕事をしなくてはいけないのだろうと追い込まれていった確信はある。自分の野心をもってして「普通の教員」にはなれそうにもない。

それでも、今の私は、小さな声でささやくことにこそ、意義を見出してしまう。

あきたこまち

堀内 菜摘
（秋田市在住）

白いおにぎりを一口食べると、「ああ、おいしい」と涙がこぼれそうになった。心の奥までゆっくりほどけていくような優しい味。農家さんが丹精込めて育てた、大事なお米。農作業の大変さを知った後に食べたおにぎりは、格別だった。

秋田県外に出る予定のなかったシルバーウイーク。ネットで見つけた稲刈り体験に申し込んだ。秋田に来たからには、稲刈りをしてみなくては。昨晩から降る雨で空気が冷えきった早朝、大仙市の山奥にある公民館まで車を走らせた。

集合場所に到着すると、メールでやりとりした男性がにっこり出迎えてくれた。「堀内さんだね。シバです、よろしく」。参加者は約20人。大学生や東京の夫婦、仙台の親子などさまざまだった。

公民館からさらに山奥へ進み、沢にある田んぼに到着。長靴や軍手を装着して車から出ると、雨がやんだ。太陽の光が山の谷間から差し込んで、田んぼを少しだけ照らした。垂れ下がった黄金色の稲穂がキラキラと輝いた。

15代続く農家の佐々木さんが、稲刈鎌の使い方を教えてくれた。いざ手刈りへ。脚を開き、腰を低く落とす。稲株を左手で握って、慎重に、でも勢いをつけて鎌を振る。（か、刈れない）。「たたくんじゃなくて、ノコギリで切るような感じ」と佐々木さん。ザクザクと何度か力を入れると、稲を刈ることができた。稲穂に泥がつかないようにまとめて、わらで縛った。何度かやっていくうちに、ザクザクとしなくても、ザクッと一度で刈りあげることができた。田んぼの端の手刈りが完了すると、佐々木さんが小型の収穫機「バインダー」を持ってきた。「次は機械でやってみよう」。

佐々木さんに横についてもらいながら、スタート。最初はふらついたが、進み始めると稲の列に対して真っすぐ進むことができた。2株分進むごとに、バタッと自動でまとまった

束が出てくる。「堀内さん、うまい、うまい！」。周りの人から拍手が送られる。刈り残しなく、無事に終えられた。（おお、気持ちいい）。自分が刈った束を自分で抱えて、「稲刈り、向いてるかも」とうれしくなった。

それからは、稲をみんなで運び、軽トラの荷台をいっぱいにした。小学生2人が稲と一緒に運ばれていった。軽トラの後ろを車でついて行く。軽トラの荷台に乗った小学生は、手のひらを上に高く伸ばして、風を感じている。その姿があまりにも美しくて、自分へのご褒美のような光景だった。

いつの間にか空は晴れ、運んだ稲を天日と風で乾燥させるため、木を組んで作った稲架（はさ）にかけた。このひと手間で、粘りやつや、うまみが保たれるそうだ。「ちなみに、このお米の品種はなんですか」と佐々木さんに聞いてみると、「あきたこまちだべ」と教えてくれた。「手塩にかけたお米ですね」。「んだんだ。今年は天気も良くて、ここ数年で一番出来がいい」。わが子の成長を語る父親のように、誇らしげな表情。目の横のしわがやさしく笑った。

稲刈りの途中、ぬかるみにはまった足を勢いよく抜こうとして、スポッと足だけが抜けて転んだ時には、全身がどろどろになって、（もう終わり…）と心が折れかけたが、そんな大変さも含めてとても楽しかった。作業中に差し入れてくれた、白いおにぎりの味は忘れられない。

一年で最も忙しいであろう稲刈りの時期に、私たちを受け入れてくれた。佐々木さんはその理由を「農村の文化を残したいから」と語ってくれた。次は、収穫したお米をみんなで食べる収穫感謝祭だ。「また来てね～！」。私たちの姿が見えなくなるまで、手を振って見送ってくれた。また佐々木さんに会いに行きたい。

本を作る側から（43）

村瀬 謙介
（小取舎）

インテックス大阪で行われた文学フリマに行ってきた。久しぶりに一人行動。朝七時台のバスに乗り難波に着いたのは十時半。文学フリマは正午からなので、一旦梅田に行き、ヨドバシカメラでプロジェクター売り場を見る。プロジェクター売り場が広い。都会はすごい。二、三〇台あるプロジェクターが壁面に投影されていてこの映像は何番のプロジェクターですというようなわかりやすさ。明るさや鮮明度の比較がわかりやすくて最高だった。ネットで見てもわからないんだよなぁ。まぁまだ買わないのだけど。そのあと中ふ頭に向かい、着きましたインテックス大阪。この度は鳥取大学の文芸部の学生から文学フリマに出るんですーと教えてもらい、仕事にも何か繋がりそうと思って家族を説得し単身乗り込みました。出店数が一五三六、ブースが一七五七もあり、すごい活気でした。出店しているのは同人誌を作っている一般の方だけでなく、出版社も参加していて、目星をつけていたブースに向かう。

まずはお隣、兵庫県加東市でひとり出版社をされているスタブロブックスさん。設立も小取舎と同じ二〇二〇年でお会いする前から親近感がわいていた。陸上をやっていたという代表の高橋さんにお会いすると、好青年をそのままおじさんにしましたというような感じでとても気さくで色々お話しできた。目星をつけて来ましたと伝えるととても嬉しそう。コピーライターやブックライターをしていた彼が出版社を設立するに至った話や、屋号のスタブロは陸上競技のスターティングブロックから来ていて一歩を踏み出すという意味でつけたんですよと教えてくれた。ご自身でも本を書かれていてすごいなぁと関心。兵庫県のことだけにとどまらず様々な地域に根付いた本をたくさん上梓されている。滋賀県長浜市西浅井町で子どものころから仲の良かった若手が立ち上げた活動チームが「米づくりは喜劇だ」と銘打ち、米を使った産官学の試みを綴った『RICE IS COMEDY』という雑誌と、高橋さん自らが書かれた出版の話で新刊の『自分で書くということ』の二冊を購入。

次に向かったのはLLCインセクツという大阪の京橋堀の出版社さんのブース。主力商品の雑誌『IN/SECTS』は、何年か前に「本をつくる」というテーマの号がスマッシュヒットし、私も買っていた。ブースに立っておられたのは、インセクツでデザイナーをされている藤本さん。ここでも出版の話や

本の話で盛り上がった。お勧めされた、ライターのスズキナオ著『大阪環状線
降りて歩いて飲んでみる』という書籍を購入。スパイスカレーキットも売っていたが買わなかった。カレーレシピ本を過去二度出したが、「レシピにあるスパイスが手に入りづらい」とか「スパイスを買っても余る」という読者の声から「じゃあスパイスキットも作っちゃう?」というノリで生まれた商品らしい。

全国的にも有名な福岡の書肆侃侃房さんも出店されていた。営業の中川さんの隣には、田中裕明賞と俳人協会新人賞を受賞し、Forbes が選ぶ「30 Under 30 Asia
2026」にも選ばれた俊英・岩田奎氏という人物がおられ、彼の句集を購入。サインをしていただいた。フリー素材で有名ないらすとやの絵を大きく使用した、句集とは思えない装幀が素敵だった。本のタイトルは『敵』。

あとは大阪枚方のまとも書房さんのブースに。社員なのか若い男性が大きな声で本の紹介をずっとしていて、それが選挙演説みたいで面白い。代表の久保さんもおられて名刺交換。その彼が書いた『働かない本屋のつくり方―枚方まとも書房の物語』を購入。

ジュンク堂書店梅田店の堀内店長とも名刺交換。日記本やエッセイが好きな文芸担当二人が作った『書店員、ZINEを作って売ってみた とある町の書店員』を購入。

いやぁ本当に時間とお金が足りない。夜七時ちょうどのバスで帰る予定で、尚且つ茨木市に友人(といってもSNS上のみ)がオープンさせたお酒が呑めるレコードショップに行きたかったので、全てのブースを駆け足で見る。実質二時間くらいしかいられなかった。最後に鳥取大学文芸部のブースに行ったら、この文学フリマを教えてくれた学生が店番をしていた。

こういうところには行くべきだな。というか出店するべきですな。皆、本の見せ方にもこだわっていて勉強になった。人が集まるブースには、売っていること自体が楽しそうな人が店番をしているという共通点があった。

小取舎の最新刊

『福本和夫 思想の再解釈』
岩田直樹 著
本体二二〇〇円
発行 2026.10.8

論語について（17）

小原　修治
（県立高校教諭
湯梨浜町松崎在住）

子貢問曰、賜也如何、子曰、女器也、曰、何器也、曰、瑚璉也。（公冶長篇第五・第四章）

子貢問ひて曰〔い〕はく、賜や如何〔いかん〕。子〔し〕曰〔い〕はく、女〔なんぢ〕は器なり。曰〔い〕はく、何の器ぞや。曰〔い〕はく、瑚璉なり。

「賜や如何〔いかん〕」の「賜」は子貢の名で、ここは第一人称としての用法。「私はどうでしょうか」と子貢が孔子に問うたのである。なお、自分の名を口にできるのは、本人または親や先生などの目上関係にある人だけであり、それ以外の人は字（あざな）で呼ぶ必要がある。ちなみに、「子貢」の「貢」は字（あざな）で、名の「賜」と意味的関連があって面白いが、この点は誰の場合も同じである。

それはともかく、いくら師弟の関係にあるとはいえ、その会話が「私はどうでしょうか」と切り出されるのは、いかにも唐突な印象が否めない。そこで、朱子の新注では、「子貢孔子の君子を以〔もつ〕て子賤に許すを見る。故に己〔おのれ〕を以〔もつ〕て問ひを為す」と説き、前章の「子　子賤を謂〔い〕はく、君子なるかな、若〔かくのごと〕き人。魯に君子無かりせば、斯〔こ〕れ焉〔いづ〕くにか斯〔こ〕れを取らん」（公冶長3）の句を踏まえた問いであると説明している。つまり、「子賤」という弟子（『論語』中ここにしか見えず、よく分からない人物）が孔子に「君子なるかな」と称賛されたことを受け、子貢が「では、私はどうでしょうか」と質問したというのである。

さて、その答えは「お前も君子だよ」ではなく、「お前は器だよ」であった。どういう意味か。朱子も説くように、『論語』為政篇第十二章に見える「君子は器ならず」の句を踏まえれば、その答えは端的に「お前は君子ではない」と述べたに等しいと言えよう。が、そう言われた子貢は、ここで会話を終わらせず、「何の器ですか」と更に問うた。それに対する孔子の答えが「瑚璉」である。朱子によれば、「瑚璉」は「皆な宗廟に黍稷を盛る器にして、飾るに玉を以〔もつ〕てす。器の貴重にして華美なる者なり」、即ち、宗廟で穀物を盛る美しい祭器だと説明している。そして、その注釈を「子貢未だ器

ならずに至らずと雖〔いへど〕も、其〔そ〕れ亦〔ま〕た器の貴き者か」と締めくくっている。

一体、孔子が子貢を「瑚璉なり」と評した真意とは何か。が、それについて考える前に「君子」と「器」との違いを明らかにしておく必要があるだろう。先に述べた「君子は器ならず」の章の注で朱子は「器は、各々其〔そ〕の用に適〔かな〕へども、相ひ通ずること能〔あた〕はず。成徳の士は、体具〔そな〕はらざる無し、故に用周〔あまね〕からざる無し。特に一才一藝を為〔な〕すのみに非〔あら〕ざるなり」と説いているが、その意味は、「器」が特定の用途に応じる「一才一藝」の者であるのに対し、「君子」＝「成徳の士」は様々な用途に応じる主体を備えた者だというのである。子路篇第二十五章でも「君子」を「其〔そ〕の人を使ふに及びては之〔これ〕を器とす」と説くから、人を「器」として使うことができる者が「君子」であろう。

要するに、孔子は子貢を「お前は人の上に立てる君子ではなく、君子に使われる器だ。が、それが何の器なのかと問われれば、宗廟で穀物を盛るための祭器である瑚璉だ」と評したものと考えられる。すると、やはり問題となるのは、孔子が子貢を「瑚璉なり」と評した真の意味なのだが、それは、朱子が説くように、お前は器は器でも価値のある貴重な器だという意味であろうか。そうかもしれない。が、ここに極めて興味深い一解釈が存在する。前にも紹介したハーバート・フィンガレット『孔子――聖としての世俗者』の、第5章「〈聖なる器〉という譬喩」に見える説である。

フィンガレットによれば、本章の「瑚璉なり」の語には「能弁で自己満足的な子貢に対して孔子が理解させようとした核心的な教えが込められている」という。そして、それは「社会はひとつの大きな儀式行為の遂行である」という教えであると説く。その上で、「瑚璉」の器が「道具一般とは異なり、儀式自体を離れては(実用的な)使用法がなく、儀礼上の機能があるのみだ」という点に注目し、人間を「瑚璉」に喩えるのは、その人が社会という大きな儀式行為の執行に従事するのに相応しい存在たることを述べたものだとしている。「人間を個人主義的な自我ではなく共同体の儀礼の参加者とみなせば、我々の目には、人間が新たな聖なる美をまとうのが映るだろう。ちょうど、供物の器が美しく映るのと同様に」。このフィンガレットの言葉に大いに触発された評論家の呉智英は、『現代人の論語』において「瑚璉なり」の語を「聖なる儀式の執行者たれ」と孔子が子貢に期待して述べた語だと論じている。

奈良さんと遁げる

古賀　啓三
（米国ミシガン州在住）

前号で、作品の総体が僕の分泌物のようなもので、僕のProxy(代理)を託す主要登場人物、といったものはない、と書いたが、僕の意図を十全に書き切れてなかったので補足する。前号末尾にも書いたように、小説の総体が「わたし」なのだが、ディテールに分泌の濃淡はあり、例えば、五歳の自閉症(がPCでなければ、スペクトラム障害)気味、失語症気味の女児、といった、Most unlikely character に、濃く僕のオブセッションと似た性向が分泌されている可能性はあり得るのだが、おそらく、僕のことを知悉した友人でも、あの子お前だよな、と指摘されることはまずない、と思う。彼はおそらく、ど助平で自己中のサムが僕だと、疑うことなく主張するであろうが、しかしこれもあながち間違いとはいえず、そこにも、僕の行動傾向や嗜癖が色濃く分泌されているだろうから。

唐突だが昨夜見た夢のことを書きたい。それは「逃げる」ことが主題だと思われる夢で、奈良さんと一緒に何かから逃走していた。手段は車と馬で、車で遁走中に巻き込まれるChaotic な渋滞は二月に行ったインドの影響だろう。なぜ馬かはわからない。読み始めたフォークナーの影響か(馬より騾馬への言及の方が多いが、騾馬の記述は露悪に近い軽侮と愛着の混合、馬に対しては憧憬と礼讃)。モンゴルの草原のようでもあるし、しかし突然流れのない沼のようなところに、ズンズン馬が勝手に入っていき、どんどん深みにはまっていって、おいおいと思っていると、先行者がいることなど知らなかったのに、一組の男女が突如ざばっと水中から姿を現す。まず人の頭、そして肩。続いて馬の頭。濡れた人と馬のからだが暮れなずむ弱光を照り返し、息を呑むように美しい。季節は変わって(笑)冬。なぜかスキー場のリフト運行を管理する小屋みたいなところが、アジトらしく、僕はそこに独りでいるのだが、電話で奈良さんの指示を受けている。僕は、抑圧されている、あるグループだか人々をラディカルに支援する組織の下っ端、新人であるらしく、(ここら辺から記憶が怪しくなるのだが)電話で説明を受けている役割、それはラジオを使った宣伝工作のような活動らしく、要するにDJのような仕事で、しかし僕は訥弁、対人恐怖、機転が利かない、等々、適性上のチャレンジがあり、しかしこれらを克服していかなければ、と使命感に奮い立つとこ

ろで目が覚めた。絶えて久しい（現実に於いては最も辟易するところの）集団の中での責任感の発露、という、晴れがましいようなカタルシスを感じながら。これは加齢とともに悪化する不眠症を抱えながら、なぜかこの一週間ほど睡眠がうまくいっていて、六時間ほどの連続睡眠、という原因不明の画期的なことが起こっていることと無関係ではないように思われる。奈良さんの登場についてだが、定有堂の読書会に、早朝起きることができれば参加させていただいているんだけど、開催日、課題本、などという自分で覚えておくべき最低限のことが覚えられず、同じく参加者、というよりは世話役のようなI博士を煩わせることになるのだが、十月の課題本、何でしたっけ、と尋ねると、SFということで、これは僕にとって、できれば敬して遠ざけたいジャンル。しかし、夢にまで出て来る心の重荷となったのは、I博士の次の一言であったようだ。

でも、この本、奈良さんの肝煎りですよ

前号も運転しながらNPRで聞いたProxyのことを枕にしたが、NPRとはNational Public Radioのことで、普段は、ニュースや時事等、報道関連が主体だが、週末はWeekend Editionと呼ばれ、遅い午前から、早めの午後にかけて娯楽番組も組まれている。僕が贔屓にしているのはWait Wait … Don.t Tell Meというクイズ番組や、The Moth Radioという、これは素人による、面白い自己体験の語り、で、形式はスタンダップ・コメディだが、出演に至るオーディション等、厳選されるのであろう、洗練されていて、僕は落語だと思って聴いている。

きのう（土曜）も、一週間分の食料をまとめ買いしに行く際、運転しながらNPRを聴いていた。っていうか、NPRのWeekend Editionを聴くために週末の朝買い物に行くので、運転しながら聴いたことが枕になりがちなのだが、きのうは、フォークがアメリカに紹介されたのは18世紀末であることを知った。これはメルヴィルの『書記バートルビー』の感想としても書いたが、父が九十三まで生き、自分も還暦過ぎると歴史観に歪みが生じる。当時のアメリカではヨーロッパの貴族に考案されたフォークはManlyではなく、つまり女々しく、とても大の男が人前で使える道具ではなかった。一般大衆が使うようになったのは一八五〇年代。父が生まれた年のわずか七十年ほど前の話である。こういう話を聞くと、アメリカという国はまだまだそのInfancy（幼児期）にあるのだな、と痛感する。トランプみたいのを国民選挙で選出しても、まあ仕方がない、と諦めやすくなる。

今回もまた何だか全編、枕で終わってしまったが、これはNPRのせいである。

楳図漫画の恐怖

ムラカミヒロミ
（フライングブックマン）

筆者にとって、楳図かずおの漫画は病院の待合室と密接に結びついている。

少年マガジンの「ひびわれ人間」も、少女フレンドの「ミイラ先生」も「ママがこわい」も、待合室で読んだ。何で、こんな病状を悪化させるような漫画が置いてあったのか理解に苦しむのだが。（床屋で読んだ「ウルトラマン」さえ、怖かった）

参考までに、筆者が、病院と床屋で読んだ楳図漫画を列挙してみよう（年月日は掲載号。Fはフレンド、Mはマガジン、少画は少年画報の略。なお、少年画報のみ購読）。

1965.6/29~7/20　ねこ目の少女　F
8/10~11/9　ママがこわい！　F
11/21~12/26　半魚人　M
11/23~66.3/8　紅グモ　F
1966.2/13~3/27　ひびわれ人間　M
7/10~67.5/7　ウルトラマン　M
1967.1/10~4/4　ミイラ先生　F
1~11月　笑い仮面　少画
5/14~5/28　復讐鬼人　M
10/15~11/5　死者の行進　M
12~68.5月　猫目小僧　少画

恐ろしいことに、殆ど切れ目なく、読み続けていることが分かる（読まなきゃいいのに）。

しかも、つらつら思うに、この時期の楳図はメジャー・デビュー直後で、怖さも怖し、これでもかの恐怖の釣瓶打ち、最も力が入っていた時代ではなかったか。

楳図ホラーの真髄は、入れ替わり（人格交換）とサディズム（肉体の毀損）ではないかと思う。

前者は、少女物の大半に表れていて、先述の作品全てがそうであり、最後の少女物となった『洗礼』は、その総仕上げといえる。

「半魚人」は両者が融合した作品。博士にすり替わった男が、子どもを無理やり手術していくのが怖い。

後者は、貸本時代からの特徴であり、その極北は『猫面』だと思うが、「ひびわれ人間」のプロトタイプ、貸本版「恐怖

人間 ― 残虐の一夜」もまた容赦のない無差別の殺戮が繰り返される(足を引き抜き、腕を千切り、首を折って殺す執拗さ)。

しかも、最後のオチは、サキもゴーリーも裸足で逃げ出しそうなブラック・ユーモアと来ている。流石に、作者も気が引けたのか(或いは版元の要請か)、有らずもがなのエクスキューズが二ページ付されている。

「ひびわれ人間」は、少年向けの商業誌ということもあってか、表現が多少ソフトになっており、怪物も無差別ではなく、母親にのみ従順(怪物の脳は、死んだ赤ん坊のものが使われている)という要素が加味されていて、ドラマが複雑になり、深みも出ている。

とはいえ、怖い、のである。フランケンシュタイン・テーマの現代版ではあるのだが、凡百のパロディではない。人造人間の姿が、醜くも恐ろしく、叫び声がまた余人の考え得ない非日常的な音で、怖気を震わせる。

余談ながら、楳図作品では、擬音語が効果的に使われていて、「ぎろり」とか「うーむ」とか、描き文字で書かれると、それだけで身がすくむ。

夜、寝られなくなるほど怖い思いをしたのは、この作品が最初で最後で、子ども心に、二度と読むまい、と心に封印していたのに、よりによって、二年後、友人が誕生日のプレゼントに総集編を贈ってくれたのである。嗚呼。

絵柄も、「ウルトラマン」の後半あたりから段々と凄みを増していき、「復讐鬼人」辺りで早くも円熟の様相を見せる。「復讐」も「死者の行進」も、ホラー作品ではなく、純粋にリアルな人間ドラマなのだが、人間心理の深みが遺憾なく描かれ、これまた「怖い」。

「ウルトラマン」は、言わずと知れたTVドラマとのタイアップ作品だ。なぜ楳図が抜擢されたのか、未だに不思議でならないのだが、とまれ、ただの漫画化にはなっておらず、特に「バルタン星人の巻」や「ミイラ怪獣ドドンゴの巻」は、正調楳図節のホラー漫画以外の何物でもない。

(今年、九月三日は生誕九十周年、十月二十八日は三回忌)

きのこのこのこ

あきの素生
（くうねるめがね）

ある日、見慣れた木の根元にきのこが生えていた。ほぼ毎日見ているはずなのに、その日のそのときまでちっとも気づかなかった。自分の拳よりも少し小ぶりで、ふっくらと丸く、白いきのこだった。なんともかわいらしい見た目だが、絶対毒きのこだろうなと思った。自分のようなきのこの素人にとって、目につくきのこ、しかも、ついつい惹かれる見目好いきのこは、毒きのこだと相場が決まっている。そうに違いない。騙されない、と警戒心を強めたまま、「白いきのこ」とググってみると、目の前のきのことそっくりなきのこの写真がいくつか出てきて、案の定毒きのこのようだった。想定どおりではあったが、どこか残念だった。

白いきのこの写真は、全国各地でこの毒きのこが大量発生しているというネットニュースに掲載されているものだった。東京でも大阪でも京都でも愛知でも、白いきのこ「オオシロカラカサタケ」が公園などにたくさん生えているという。長雨の影響が原因のひとつとして挙げられていたが、たしかに、9月は雨が多かった。

きのこは好きだ。見た目もユニークでいいなと思う。鳥取県立博物館できのこの展示が開催されたときは、種々のきのこを興味深く見てまわり、グッズ売り場のガチャでリアルななめこのストラップが当たった。しかし何より、食べるのが好きだ。当たり前だが、「きのこ」と十把ひとからげにはできない。それぞれ風味や歯ざわりが異なる。そして、大抵どの風味・歯ざわりもそれぞれ好みだ。

しめじや舞茸、えのきは、（昨今の物価上昇分はさておいて）年間通してあまり価格が変わらないのでありがたい。それぞればらばらにして混ぜ合わせ、小分けにしてパッキングし凍らせておく。味噌汁、スープ、カレー、鍋、炊き込みご飯と、具をちょい足ししたいときに重宝している。凍らせると、風味や栄養価が増すとも言われている。よいことしかない。切らすと困るので、ストックが尽きない頻度でこの小分け・冷凍作業を行っている。

家にある一番大きなボウルに、舞茸、石づきを落としたえのき、しめじ（ときどきエリンギ）を手で適当な大きさに裂きながら入れていく。それぞれが好き勝手な形をしているので、ふわふわと積み重なり、ボウルがすぐにいっぱいに

なる。それをこぼさないようにざっくりと混ぜて、各きのこがまんべんなく入るように、ラップの上に小分けにして置く。冷凍庫に入れやすいように、四角い形に整えながらラップできのこを包む。ふわふわしたままだとかさばるので、なるべく小さくなるよう、ぎゅっと。このきのこキューブ(というよりは、人形のざぶとんみたいな形だが)を、ジップバックに数個詰め込んで、それを冷凍室に入れる。取りかかるまでは、きのこのパックを横目に、ちょっとめんどうだな、とぐだぐだするのだが、食材の買い出しに行っていない日にいざ汁ものを作ろうと思い立ったときなどは、過去の自分の働きに感謝する。

　きのこの中で、なんとなく、しいたけは別格のように感じている。件のきのこキューブには、しいたけを入れることがない。しめじや舞茸、えのきは用途がほぼ同じで、しいたけは独自の使いみちがあるからかもしれない。個人的な感想だが、しいたけは、「和」みが強い。例えば、しいたけをカレーやシチューに入れたことがない。豚汁やうどん汁、筑前煮、水炊き鍋などでは、しいたけの有無がうまさに少なからぬ影響を与える。なんだかんだと書いたが、平たく言って、しいたけが大好きなのだ。

　ほかのきのことは混ぜないが、しいたけも冷凍している。先述の料理(豚汁や水炊き鍋など)を作るときに、できればしいたけを欠かしたくないからである。でも、本当は、冷凍したものではなく、買ってきたその日に、肉厚の生しいたけをそのままバター焼きなどにして、醤油をからめて香ばしさをまとわせたところに、はふはふ言いながらがぶりと食らいつきたい。

　一年じゅう手に入るきのこたちだが、旬のものは格別。秋のたのしみのひとつである。

ご案内

ドラメリア（座敷わらし）

◇

定有堂教室「読む会」（講師　岩田直樹氏）
定有堂教室「ドゥルーズを読む会」
定有堂教室「読書室ビオトープ」
　それぞれ会場は　とりぎん（県民）文化会館
太極拳・「葉香クラブ」（日本武術太極拳連盟加盟団体）
会場　麒麟スクエア（市役所二階　水曜夜・土曜昼）

・定有堂教室と太極拳の詳細は
　下記の、QRコード参照
　（@ドラメリア）

『音信不通』紙版の置き処
・県立図書館2階ハンフコーナー
・エスキース（倉吉）　バックナンバーあります。
・森の生活者　　・邯鄲堂・
・cafe mellow（カフェ メロウ）
・SHEEPSHEEP BOOKS（定有堂ビル2階）
・定有堂ビル2階「音信不通」編集部

・編集後記…

職場ではまだまだ半袖で無問題だが、さすがに行き帰りは一枚羽織ろうかなと感じるようになった。元気一杯の小学生や運動部男子高校生と肩を並べて半袖族にいるのは、なんだか少し肩身が狭いような。

夏に迎えたニャンは、ふさふさもこもこしていた日本猫系統の先住ニャン達と比べると圧倒的に薄着で、初めて触れたときは「すぐ肉だな！」とびっくり。やはり寒さに弱いらしく、これは冬に向けて備えなければ。

ドラメリア（編集長）

・岩田直樹さんの新著『福本和夫　思想の再解釈』小取舎刊。10月27日（火）「読む会」で課題本。とりぎん県民文化会館19時から。
・11月8日（日）やまびこ館研修室にて講演会。13時30分から。

・歸山健一さんのハガキ版『本棚の溜息』が10月号（434号）からレイアウト変更。ハガキ新聞のような風情だったのですがマイクロソフトのアプリが使えなくなったのが原因。見慣れたものが変わるのは大事件ですね。

奈良敏行（発行人）